かんすい！
日本水環境学会関西支部ニューズレター
No.26　（2022年9月29日発行）

－ 編集・発行 －
日本水環境学会関西支部
－ 連　絡　先 －
〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1
近畿大学薬学部医療薬学科
緒方　文彦
E-mail：ogata@phar.kindai.ac.jp
TEL/FAX 06-4307-4013

支部長挨拶

第37･38期関西支部長　和田　桂子
（近畿建設協会 水環境研究部門、琵琶湖･淀川水質浄化研究所）

（公社）日本水環境学会関西支部会員の皆様には、日頃より関西支部の活動にご支援を賜り感謝いたします。私が関西支部長を務めさせていただいております昨年度第37期は、新型コロナウイルス感染拡大の情勢により、支部の活動が例年のようにできず心苦しく思っております。このような状況でしたが、支部にZOOMを導入し、幹事会や各種委員会、部会ミーティング、また、初めてのオンライン形式で支部総会を開催しました。コロナ禍で一昨年度の総会が中止となりましたので、同時に2年間の表彰式および受賞された方々のご講演を行うことができ大変うれしく存じます。幹事の皆様も不慣れななか無事成功裡に終え、よい経験であったと思います。

私が関西支部長に就任させて頂いた際に、「新しい取組みや仕組みを積極的に取り入れ、少しでも学会会員にとって居心地の良い支部、元気な支部」と書かせていただきましたが、その1つは進められたのではと感じています。この原稿も第6波が収束せず、第7波が来るのではともいわれる中で執筆しています。オンライン形式や対面方式とのハイブリッド形式など、新たな手法を取り入れ、時勢に応じて柔軟に対応することも必要ではないかと思う次第です。そして、コロナ禍で集うことが難しい局面が多く、自由に活動がしにくい状況でも、支部活動や会員の交流の機会を作っていくことはとても重要であり、それが今後いつか人と人とのつながりへと通じていくのではないかと思います。今年度は支部セミナーも開催されます。専門分野や世代を超えた幅広い交流の機会の一つになると考えておりますので、ぜひ多くの方々にご参加いただければ幸いです。

このように関西支部では、関西の水環境の保全と創造をテーマに組織を越えた研究や調査、知識の普及などの活動と、そのための環境構築を目的として、見学会、総会やセミナー・講演会、支部表彰の実施や開催などを行っております。なかでも支部の社会・文化賞を受賞した団体が、本部の水環境文化賞・みじんこ賞を近年5年間連続で受賞されていることは、関西支部の水環境に対する活動の大きな原動力になっていると感じました。さらに、2018年度より設置した日本水環境学会年会への発表や参加のための研究助成制度では、昨年度2名が採択されました。若い研究者が助成に応募し学会へ参加して多くを学ばれたとの報告を頂き、支部としても大変うれしい限りです。今年度もシンポジウム、年会への助成を行っておりますので、奮って応募されることを期待しております。

最後になりますが、関西支部の恵まれた地の利の特長を活かし、産官学が一同に実りある支部運営・活動ができればと思います。今後とも皆様のより一層のご協力を賜り、行事・活動にご参加いただき交流を深め、そして関西支部を盛り上げていただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

部会紹介

川部会、化学物質部会、環境モニタリング情報部会の3部会の活動内容を以下に記します。

川　部　会

長引くコロナ禍で多くの活動が影響を受けていることは、昨年も書きました。しかし、そう言っていれば何も進まなくなることも私たちは体験しています。

我々の活動およびその成果に関する情報発信の仕方も変更を迫られています。もちろん、学会活動全体もリモート手法を主としたものに変容を求められています。おそらく、このような流れは国民の多くがインフルエンザの場合のように抗体を獲得するまで続くと思われます。ただ、普通のインフルエンザと異なるのは症状の劇症性でしょう。新型コロナの場合は急速な症状の悪化や、症状が好転しても体の各部位に後遺症が残ると言われており、年齢が上がってきた身としては、感染に対してインフルエンザでは感じないような恐ろしさを感じます。人間とウイルスの間では、長い生物進化の中で共生関係を獲得し安定状態に入る場合も多いことが知られていますが、そんな状態を我々が獲得するまで、生活や行動の変容を強いられるかもしれません。

このようなことを考えていると、「川部会活動」が何もできなくなることに気づいて、部会では川歩きをはじめ活動の仕方を細部まで見直すことに決めました。その大きな変更の一つは、20年以上続け今やこの部会活動のメインの活動となっている「川歩き」を、多くの会員が参加するエクスカーション方式でやらずに、自分1人または数名規模で実施することにしました。そして、移動手段も「密」状態を作り出してしまうマイカー相乗り（参加会員の運転についても、高齢者が多くなり高齢者運転の危険が高まっています）をできるだけ避け、すいた公共交通を積極的に利用することにしました。現在、このやり方で実施する“木津川中流部”の川歩きを計画していますが、近畿地方の複数の府県（大阪、京都、兵庫）で緊急事態宣言が再発出されたりしている状況であり、まだ実施できていません。

現在までに踏破した河川数は、関西地域だけで80河川近くにのぼり、それ以外にも中部地方や海外の河川（韓国や台湾の河川）でもエクスカーション方式で川歩きを行ってきました。しかし、エクスカーション方式での成果を発信するにもコロナの影響が表れてきています。以下の写真は、韓国ソウルの中央を流れている歴史的な価値がある清渓川（チョンゲチョン）の西の上流端から東の下流端まで約10kmを、カメラ片手に踏破した記録です。

この川は設計段階から話題を呼び、世界的なコンペでも賞を取りました。ソウル市民がこの川の再生を、手を打って喜ぶのも理解できます。

また、会員の中には、これまでより趣味の範囲で色々な川を歩き、その感想や写真を忘備録や日記のような形で蓄積している方もおられます。このような川の情報も貴重でありご本人の了解のもとに公開していっても良いのではないかと思っています。川部会の発信している川の情報は新たに踏襲した流域についてのみ扱ってきましたが、本棚の片隅に埋もれている古い情報やパソコンのハードディスクに残っているファイルなど、まだその川を体験していない人が見れば、流域の意外な一面を興味深く伝えてくれるかもしれません。

これらの新しい発想は、いわばコロナ禍の中で苦労の上に思い浮かべたアイデアであり、「禍を転じて福と為す」のことわざ通り、我々にとって川部会活動のマンネリ化を打破する幸運なものとなるかもしれません。むしろ、そのような幸運を得るために川部会活動をより一層楽しく、意味のあるものにしていきたいと思っています。

写真1 都会のオアシス ソウル 清渓川

写真2 都市の開発志向の象徴として
残された高架橋の橋脚